

非現実的特性の獲得に関する幼児の信念：願望の役割

豊島 美佳^{*1}・村瀬 俊樹^{*2}

Children's beliefs about the acquisition of unreal traits : The role of wishes

TOYOSHIMA Haruka, MURASE Toshiki

要旨 本研究は、非現実的特性、および、現実的特性の獲得について、幼児が、願望のあるなしに依存して判断しているのかどうかを検討した。幼児期、および、小学生期を通して、ある特性を持っていない主人公が、大人になって特性を獲得すると思うかという質問に対する、年少児40名(平均4歳5か月)と年長児40名(平均6歳5か月)の反応を分析した。その結果、現実的特性については、年少児も年長児も、願望のある場合の方が願望のない場合よりも、大人になって特性を獲得できると考える一方、非現実的特性については、年少児は、現実的特性と同様に、願望がある場合の方がない場合よりも、大人になって特性を獲得できると考えるが、年長児は、願望のあるなしに関わらず、大人になってもその特性を獲得できないと考える傾向があった。以上の結果から、年少児においても願望に依存して特性の獲得を考えていること、年長児になると、それに加えて非現実的特性の獲得可能性を考慮に加えて判断をするようになるのではないかとということが考察された。

キーワード：非現実的特性、楽天主義、願望的思考、幼児

幼児は、「大きくなったら〇〇レンジャーになりたい」、「大きくなったらライオンになりたい」など、テレビのキャラクターや動植物などになりたいと言うことがある。森(1995)によると、年少児～年長児に対して大きくなったらなりたいたいものを尋ねたところ、年少児は、半数以上がテレビのキャラクターや動物になりたいと答えており、また、テレビのキャラクターには80%程度、動物には半数近くがなれると答えていた。年長児

になると、なりたいたいものとしてテレビのキャラクターや動物を挙げる割合は10%程度まで減少し、なれると答える割合も減少するが、それでも無視できない割合の子どもがテレビのキャラクターや動物になれると答えている。富田(2004)も、大人になつたらなりたいたいものとして、テレビのキャラクターや動植物など人間がなれるわけではないものを挙げている割合は、年少児では60%以上あり、年長児では減少するが、25%程度見られる

*1 島根大学法文学部卒業生

*2 島根大学人間科学部

ことを報告している。

幼児が将来の夢としてテレビのキャラクターや動植物などを挙げる背景には、幼児期におけるどのような認識のあり方が反映されているのだろうか。

一つ考えられることとしては、表面上の変形によっても、種としての同一性が変容しないと考える本質主義的傾向が、幼児期には弱いことがある。幼児においても、動物から植物へなどのように、大きく異なるカテゴリーへの変容に関しては、表面上の変形を行っても同一性は保持されるとみなす本質主義的な考えを持っているものの、動物というカテゴリーの中では、ある動物種から別の動物種への変容が表面上の変形によって起こると考えており (Keil, 1989)、幼児における本質主義的な考えは、小学生以降よりも比較的弱いと考えられる。大きくなったらテレビのキャラクターや動植物になりたいしなれると考える背景には、本質主義的に人間という種としての同一性が保持されるという考えが、制約として働きにくいのかかもしれない。

もう一つ考えられることは、望ましい特性を獲得できると考える傾向である。テレビのキャラクターは様々な特殊能力を持っているものとして描かれているが、今はそういった能力を持っていないとしても、将来的にはその特性を獲得できると考える楽天的な傾向が幼児期にはあるのではないかということである。本研究は、この点を検討することを目的とする。

Lockhart, Chang, & Story (2002) は、幼児期においては、ネガティブな特性が将来的にはポジティブなものになりうるという楽天主義的な考えをする傾向があると述べている。彼女らは、ある人が5歳の時にネガティブな特性（身体的特性、心理的特性、身体的

でもあり心理的でもあるハイブリッドな特性) を持っており、その特性に関してよくなるよう望んでいるが、10歳の時もやはりネガティブな特性のままであり、よくなるよう望んでいたというストーリーを聞かせ、その人が21歳になった時に、その特性に関してよくなっていると思うかどうかを5～6歳児、8～9歳児、大人に対して尋ねた。その結果、いずれの特性についても、5～6歳児は8～9歳児以降よりも、21歳になった時にはよりよい状態になっていると答える傾向があった。5～6歳児は、ポジティブな特性については、21歳の時点でも5歳の時のポジティブな特性は維持されると考えていた。以上のことから、幼児期には、人間の持つ特性に関して、楽天主義的な考えをしているというのである。

特性に関する考え方は、文化によって異なり、北米の人々と比較して東アジアの人々は、特性が固定的で変わらないものであるという実体理論的な考えをする傾向が弱く、特性は努力などによって伸ばすことができるという増加理論的な考えをする傾向が強いが (東, 1994; Norenzayan, Choi, & Nisbett, 2002)、日本の幼児においても、米国の幼児と同様に、人間の特性に関する楽天主義的な考えが、小学生以降の人よりも強くみられることが明らかになっている (Lockhart, Nakashima, Inagaki, & Keil, 2008; 中島・稲垣, 2007; 中島・田中, 2017)。

それでは、幼児は、どうして、ネガティブな特性が将来的にはポジティブなものになりうると思うのだろうか。

中島・稲垣 (2007) は、特性がポジティブなものに変容することの理由として、努力・練習を答える割合が8歳以降は多くなっていることを報告している。中島・田中 (2017)

でも、特性が変容することの理由として、努力・練習や願望・意欲を答える割合が7～8歳以降多くなっていることを報告している。

また、中島・田中（2017）は、主人公がネガティブな特性を変えようという願望を持っていたり、変えようと努力するということがあるかどうかを実験的に操作し、それによってネガティブな特性が変容する可能性についての考え方が変わるのかどうかを検討している。研究1では、願望の有無による違いを検討した。すなわち、ネガティブな特性を持っている5歳の主人公がとてもポジティブな特性になりたいと思っているストーリーを与えて、大人になった時の特性を尋ねる場合と、ネガティブな特性を持っている5歳の主人公がネガティブな特性のままがいいと思っているストーリーを与えて、大人になった時の特性を尋ねる場合を比較した。その結果、幼児（4歳4か月～6歳3か月）は願望の有無にかかわらずネガティブな特性がポジティブなものへ変容すると答えるが、小学生では願望のある場合の方が、ない場合よりもポジティブな特性に変容すると答えていた。また、研究2では、願望と努力の有無による違いを検討した。すなわち、ネガティブな特性を持っている5歳の主人公がとてもポジティブな特性になりたいと思っているががんばったというストーリーを与えて、大人になった時の特性を尋ねる場合と、ネガティブな特性を持っている5歳の主人公がネガティブな特性のままがいいと思っていてがんばらなかったというストーリーを与えて、大人になった時の特性を尋ねる場合を比較した。その結果、幼児（5歳0か月～6歳7か月）は、やはり、願望と努力の有無による違いは見られず、いずれの場合も特性がポジティブな方向に変容すると答えていた。中島・田中

（2017）は、願望があることはそれへ向けて努力することを含意しているを見なし、小学生になると努力するかどうか依存して特性がポジティブなものに変容するかどうかを考えるようになるが、幼児期は、努力するかどうか依存せず特性がポジティブなものに変容すると考えていると考察している。

しかしながら、3歳以降の幼児においても、自分が望んだことが結果として生じやすいという願望的思考(wishful thinking)をする傾向があることが明らかになっている(Wente, Goddu, Garcia, Posner, Fernández Flecha, & Gopnik, 2020)。Wente et al. (2020)では、人間の特性ではなく、自分が望んでいるカード等が出現する可能性を高く見積もる反応を示すことによって願望的思考をする傾向を明らかにしており、人間の特性について、願望を持った人がその願望通りの特性を獲得できるのかどうかの判断とは異なっている。しかしながら、幼児が、願望を特性の変容と関連付けてとらえていないかどうかはさらに検討する余地があるだろう。本研究では、願っていることについて努力しているかどうかは問題とせず、願望を持っているかどうかだけを問題とする。

ところで、中島・田中（2017）で検討された特性は、「走るのが遅い」といった身体的特性や「意地悪である」といった心理的特性など、現実の人間が持っている特性であった。「空を飛ぶ」などの現実の人間が持っていない特殊能力を、現在は持っていないが将来的には持つことができるという方向に変容可能であると考えられるかどうかは検討されていない。Lockhart, et al (2008)は、5-6歳児も、「空中に浮かぶ」などの非現実的な特性については、大人になって獲得できると考える傾向は、身体的・心理的な現実的特性よ

りも低いことを明らかにしているが、それが願望のあるなしによって変わるのかどうかは検討していない。幼児は、非現実的特性の獲得と、特性獲得への願望のあるなしとの関係をどのように考えているのだろうか。

このことを考えるにあたり、幼児が非現実的な存在をどのように考えているのかを見てみよう。想像された架空の存在に対して、幼児はその実在性と非実在性の間を揺れ動いて認識している時期であると考えられる。想像した対象やおぼけなどを他者から見えるか、実在するか (real であるか) を質問した場合、4歳児も、それらの対象が現実の対象とは異なり非実在のものであると考えている。ただし、箱の中にうさぎやおぼけがいることを想像させた場合、想像したうさぎやおぼけが実在のものではないと考えていたにもかかわらず、何も想像しなかった箱ではなく想像した箱をまずのぞきに行き、半数近くの者はその時にうさぎやおぼけが本当にいるのではないかと思ったと答えていた (Harris, Brown, Marriott, Whittall, & Harmer, 1991)。また、テレビのキャラクターなどの架空の存在について、現実に見かける扮装物を偽物だと考える傾向は4歳から6歳の間に発達するが、キャラクターがどこかに存在するという実在性について否定する傾向は6歳から8歳の間に発達する (富田, 2002)。

以上のように、幼児は、テレビのキャラクターなど現実には存在しないものに対して、非実在性を認識し始めている。そのことが制約として働き、テレビのキャラクターが持つ特殊な能力を将来持てるようになるという変容可能性については、現実の人間の身体的特性や心理的特性が将来的にポジティブな方向に変容する可能性とは異なる考え方をすることもかもしれない。

そこで、本研究は、幼児が、「空を飛ぶ」などの非現実的特性について、その特性獲得への願望のある場合と願望のない場合を設定し、大人になったらその特性を持てるようになるかどうかを比較検討することを目的とする。その際、「家を建てる」などの現実的職業的な特性を大人になったら持てるようになるかどうかと比較して検討する。

幼児においても願望的思考を行っていることから考えると、非現実的特性においても、現実的特性においても、そのようになりたいという願望を持っている場合はそうでない場合よりも、大人になるとその特性を獲得できると、幼児は考えやすいと考えられる。ただし、非現実的特性を現実的特性と区別することが幼児期に進んでいることから考えると、年長児は、非現実的特性に関しては、願望を持っていたとしても、大人になるとその特性を獲得できるとは考えにくいだろう。

したがって、本研究では、以下の4つの仮説を検討することとする。

1. 非現実的特性に関しては、年少児においては、願望ありの場合の方が願望なしの場合よりも、特性を獲得できると考えるが、年長児においては、願望のある・なしによる差は見られないだろう。

2. 現実的特性に関しては、年少児においても、年長児においても、願望ありの場合の方が願望なしの場合よりも、特性を獲得できると考えるだろう。

3. 非現実的特性に関しては、願望ありの場合は、年少児の方が年長児よりも特性を獲得できると考えるが、願望なしの場合は、年齢による差は見られないだろう。

4. 現実的特性に関しては、願望ありの場合も願望なしの場合も、特性の獲得に関して、

年齢による差は見られないだろう。

予備調査

本実験で用いる非現実的特性および現実的特性を決定するために、予備調査を行った。非現実的特性は、大部分の幼児がそのような特性を持つ人は存在しないと考えていること、現実的特性は、大部分の幼児がそのような特性を持つ人が存在すると考えていることを決定のための判断基準とした。また、幼児が、特性について極端にポジティブまたはネガティブな感情を抱いていないことも判断基準とした。

対象児

3歳6か月～6歳5か月の幼児34名を対象とした。

材料

幼児向け雑誌やテレビを参考にし、非現実的特性として、「車を片手で持ち上げる」、「ビルの屋上までジャンプする」、「空を飛ぶ」、「口から火を吐く」、「手で触って友達のけがを治す」、「なりたいたいものに変身する」、「新幹線より速く走る」、「欲しいものをポケットの中から出す」、「お花と話をする」の9つ、現実的特性として、「家を建てる」、「動物の病気を治す」、「お菓子を上手に作る」、「車を運転する」、「病気になる」、「人のものを盗む」の6つの特性を取り上げた。それぞれの特性を表すイラスト（210mm×297mmの画用紙に描いたもの）を準備した。

手続き

まず、対象児に質問の意図を理解してもらうために、練習問題として、砂時計を提示して対象児に触らせながら、砂時計を持ちあげることができる人はいることを確認し、次に、砂時計の中の砂を何もせずに手の中に移動さ

せることができる人間はいると思うかを対象児に質問し、そのような人はいないことを確認した。

対象児が質問の意図を理解したことを確認した後、それぞれの特性について、それを表すイラストを見せながら、1) その特性を現実を持っている人間はいると思うか、2) なぜそのように答えたかその理由、3) 対象児自身がそのようになれるとしたらなりたいたいと思うか、という3つの質問を行った。

対象児には、すべての特性について、この3つの質問を行った。質問の順番はランダム順とした。

結果

それぞれの特性について、その特性を持つ人間はいると思うか、いないと思うかの質問で、「いる」と答えた対象児の割合、対象児自身がそのようになれるとしたらなりたいたいと思うか、なりたいたくないか、という質問に、「なりたいたい」と答えた対象児の割合を図1に示した。

非現実的特性については、「いる」と答えた対象児の割合が低いこと、現実的特性については、「いる」と答えた対象児の割合が高いことが本実験で用いる特性としてふさわしい。また、非現実的特性、現実的特性ともに、

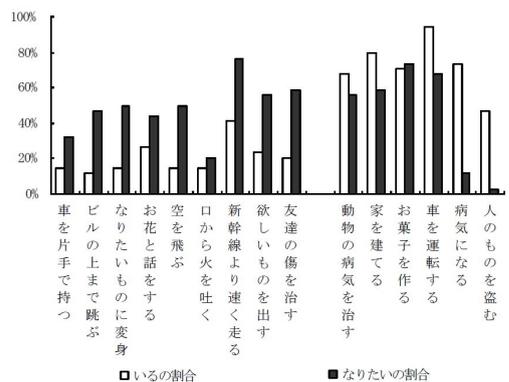


図1 「いる」、「なりたいたい」と答えた割合

「なりたい」と答えた対象児の割合が50%前後であることはその特性に対して特にポジティブまたはネガティブな感情を抱いていないと判断されることから、「なりたい」という答えが50%前後の特性が本実験で用いる特性としてふさわしい。

以上の基準を満たすものとして、非現実的特性は「空を飛ぶ」、「なりたいものに変身する」の2特性を、現実的特性は「家を建てる」、「動物の病気を治す」の2特性を本実験で用いる特性とした。

本 実 験

方 法

対象児

年少児46名（範囲 3歳6か月～4歳11か月、平均4歳5か月）、年長児40名（範囲 5歳9か月～6歳7か月、平均6歳5か月）を対象とした。分析にあたっては、問いに対する言語的応答が得られなかった対象児1名、および、現実・非現実の判断ができなかった5名を分析から除外した。

分析対象となったのは、年少児願望あり群20名、年少児願望なし群20名、年長児願望あり群20名、年長児願望なし群20名であった。

実験計画

年齢（年少・年長）×願望（あり・なし）×特性（非現実・現実）の3要因計画であった。年齢および願望は対象児間要因、特性は対象児内要因とした。

材 料

非現実的特性として「空を飛ぶ」と「なりたいものに変身する」、現実的特性として「家を建てる」と「動物の病気を治す」を用いた。それぞれの特性を表すイラストを準備した。

イラストは男児用のものと女児用のものを作成した。

手続き

現実・非現実の理解 4つの特性について、「家を建てる」と「動物の病気を治す」は現実的特性として、「空を飛ぶ」と「なりたいものに変身する」は非現実的特性として理解しているかどうか確認するため、そのような特性を持つ人間はいると思うかいないと思うか質問をした。現実的特性に対して「いない」、非現実的特性に対して「いる」と答えた場合は、なぜそのように判断したのかを尋ね、現実的特性は「いる」、非現実的特性は「いない」という判断となるよう促した。促しても現実的特性について「いない」、非現実的特性について「いる」と答え続けた対象児は、分析から除外した。

ストーリー 願望あり群では、対象児と同性・同年齢の主人公が、それぞれの特性について、大人になったらできるようになりたいと思っており、小学生になってもできるようになりたいと思っているストーリーを聞かせ、その後、大人になった主人公がそれぞれの特性についてできるようになったと思うかを尋ねた。願望なし群では、対象児と同性・同年齢の主人公が、大人になったらなりたいと思っておらず、小学生になってもなりたいと思っていないストーリーを聞かせ、その後、大人になった主人公がそれぞれの特性についてできるようになったと思うかを尋ねた。

質 問 まず、主人公がそれぞれの特性についてできるようになりたいと思っていたかどうかを尋ねた（願望確認質問）。次に、最も重要な従属変数として、大人になった主人公が、それぞれの特性についてできるようになったかどうかを尋ね（実現性質問）、続いてそのように答えた理由を尋ねた。すべての



1. 対象児と同年齢

2. 小学生になった

3. 大人になった

4. 特性を獲得したか

図2 本実験で用いたイラスト 「空を飛ぶ」(女児用)

特性について、ストーリーを聞かせて質問をすることが終了した後、対象児自身がそれぞれの特性についてできるようになりたいと思うかどうかを尋ねた。

ストーリーと質問の例 願望ありの場合のストーリーと質問の例は以下の通りである。願望なしの場合のストーリーと質問はイタリックの部分をも()内に変更したものである(図2)。

「これは○○ちゃんと同じ歳で、**という名前の女の子です。****ちゃんは大人になったら空を飛ぶことができるようになりたいと思っています(空を飛ぶことができるようになりたいと思っています)。それから何日も何日もたちました。****ちゃんは小学生になりました。小学校に入っても**ちゃんは空を飛ぶことができるようになりたいと思っています(空を飛ぶことができるようになりたいと思っています)。また、何日も何日もたくさん日にちがたちました。そうして大人になりました。****ちゃんは空を飛ぶことができるようになりたいと思っていたんだっけ、思っていなかったんだっけ(願望確認質問)。じゃあ、**ちゃんはこの絵のように空を飛ぶことができるようになったと思いますか、なれなかったと思******

いますか(実現性質問)。」

結果

実現性質問

それぞれの特性に関する実現性質問で主人公が特性について「できるようになった」と答えた場合、1点を付与することとした。非現実的特性および現実的特性ともに、特性が2つずつあるので、どちらの特性についても「できるようにならなかった」と答えた場合は0点、どちらの特性についても「できるようになった」と答えた場合は2点、どちらか一方の特性についてだけ「できるようになった」と答えた場合は1点となる。

この得点について、年齢(年少・年長)×願望(あり・なし)×特性(非現実・現実)の3要因分散分析を行った。その結果、願望の主効果があり($F(1, 76) = 31.78, p < .001, \eta_p^2 = .30$)、願望ありの方が願望なしよりも「できるようになった」と答えていた。特性の主効果もあり($F(1, 76) = 33.28, p < .001, \eta_p^2 = .31$)、現実的特性の方が非現実的特性よりも「できるようになった」と答えていた。年齢の主効果は見られなかった。年齢×願望($F(1, 76) = 4.93, p < .05, \eta_p^2 = .06$)、年齢×特性($F(1, 76) = 20.13, p < .001, \eta_p^2 = .21$)、および年齢×願望×特性($F(1, 76) = 6.57, p < .05, \eta_p^2 = .08$)の交互作用が見られた(図3)。

年齢×願望×特性の交互作用が見られたため、それぞれの年齢において、願望×特性の単純交互作用を調べた。その結果、年少児では願望×特性の単純交互作用は見られず、年長児においてのみ願望×特性の単純交互作用が見られた。さらに単純・単純主効果を調べた結果、年少児では非現実的特性も現実的特性も願望ありの方が願望なしよりも

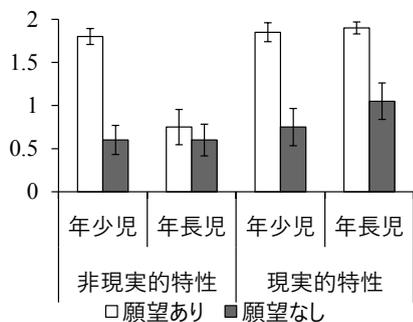


図3 「できるようになった」と答えた特性数 (誤差棒は標準誤差)

「できるようになった」という判断が有意に多いが、年長児では非現実的特性には願望による違いは見られず、現実的特性についてのみ願望ありの方が願望なしよりも「できるようになった」という判断が有意に多かった。この結果は、年少児は、特性が現実的なものであるか非現実的なものであるかに関わらず、願望がある場合の方が願望がない場合よりも、大人になってその特性を獲得すると判断しているのに対して、年長児では、非現実的特性の場合は、願望のある・なしに関わらず特性獲得の可能性は低く判断し、現実的特性については、願望がある場合の方が願望がない場合よりも特性を獲得すると判断していると言え、仮説1および仮説2は支持された。

また、それぞれの特性について、年齢×願望の単純交互作用を調べた結果、非現実的特性においてのみ年齢×願望の単純交互作用が見られ、現実的特性については単純交互作用は見られなかった。単純・単純主効果を調べた結果、非現実的特性については、願望ありの場合は、年少児の方が年長児よりも「できるようになった」と判断する傾向があり、願望なしの場合は年齢差がなく、どちらの年齢でも「できるようになった」と判断する傾向は低かった。また、現実的特性については、願望ありの場合も願望なしの場合も年齢差は見られず、願望ありの場合は「できるように

表1 「できるようになった」理由として挙げられた回数

	非現実的特性		現実的特性	
	年少児	年長児	年少児	年長児
願い/願望	6(13)	5(19)	2(3)	13(22)
生物学的説明	0(0)	0(0)	0(0)	6(10)
加齢/成熟	19(40)	4(15)	21(40)	4(7)
努力/練習	0(0)	0(0)	0(0)	3(5)
神的なものの介入/魔法	0(0)	3(11)	0(0)	1(2)
学習	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
言語的理由なし	23(48)	15(56)	29(56)	32(54)

(カッコ内は%)

なった」という判断をする傾向が高いが、願望なしの場合は「できるようになった」という判断をする傾向は低かった。これらの結果は、仮説3および仮説4を支持している。

実現性判断の理由

それぞれの特性について「できるようになった」と対象児が判断した理由を、Lockhart et al.(2002)にならって、7つのカテゴリーに分類した。7つのカテゴリーは、1) 願い/願望(「主人公がなりたいて思っていたから」など)、2) 生物学的説明(「人間だから」など)、3) 加齢/成熟(「大きくなったから」など)、4) 努力/練習(「一生懸命頑張ったから」など)、5) 神的なものの介入/魔法(「優しい魔法使いが呪文をかけてくれた」など)、6) 学習、7) 言語的な理由なし(「なれたから」など繰り返すものを含む)であり、2名の評定者が独立に評定した。一致率は94%で、不一致のケースは協議により決定した。

表1に、非現実的特性および現実的特性それぞれについて「できるようになった」と判断した理由として挙げられた回数とその割合を示す。

言語的な理由が挙げられない場合が多いが、次いで、加齢/成熟、そして、願い/願望が挙げられることが多かった。

考 察

本研究の結果、仮説の1~4はいずれも支

持され、現実的特性については、年少児も年長児も、願望のある場合の方が願望のない場合よりも、大人になって特性を獲得できると考える一方、非現実的特性については、年少児は、現実的特性と同様に、願望がある場合の方がない場合よりも、大人になって特性を獲得できると考えるが、年長児は、願望のあるなしに関わらず、大人になってもその特性を獲得できないと考える傾向があった。

願望に依存した特性の獲得判断

人間の持つ現実的な特性に関しては、これまで、小学生以降は願望/努力に依存してポジティブな方向に変容すると考えるが、幼児期においては願望/努力にかかわらず、ポジティブな方向に変容すると考えていることが明らかにされてきた(中島・田中, 2017)。中島・田中(2017)の研究1では、本研究と同様に、主人公が努力するかどうかは明示されておらず、願望を持っているかどうかだけが明示されているだけであったが、幼児は願望のあるなしに関わらず、大人になると特性がポジティブな方向に変容すると考えおり、本研究で、年少児・年長児ともに願望がある場合の方が願望がない場合よりも大人になって特性を獲得すると考えていたのと異なる結果を得ている。

本研究と中島・田中(2017)の違いとして、以下の3点があげられる。第1に、本研究では、「家を建てる」や「動物の病気を治す」というような、幼児であれば獲得していないのが当然で獲得していないことがネガティブであるとはいえない特性を、大人になって獲得するかどうかを問うていたのに対して、中島・田中(2017)では、「走るのが遅い」や「意地悪」など、幼児であってもその特性を持ちうるネガティブな特性が大人になってポジティブなものに変容するかどうかを問うてい

た。第2に、本研究で用いた特性は、予備調査で60%程度の幼児が「なりたい」と答えていたものであり、必ずしも大多数の幼児がそうなりたいと考えるものではないのに対し、中島・田中(2017)では、「走るのが速い」、「優しい」など大多数の子どもがそうなりたいと考えると思われる特性への変容を問うていた。第3に、本研究では、大人になって「できるようになった」か「できるようにならなかった」かの2択で問うていたのに対して、中島・田中(2017)では、「ネガティブなまま」、「少しポジティブになる」、「とてもポジティブになる」という3択で問うていた。これらの違いのいずれが結果の違いをもたらしたのかは明確ではないが、4歳以降の幼児期においても、願望に基づいて、特性の獲得を考え始めていることを明らかにしたことは本研究の貢献である。

本研究では、幼児においても願望に依存して特性の獲得を考えていることを明らかにしたが、これは、努力に依存して特性の獲得を考えることとは区別することが必要である。小学生になると、特性変容の理由説明として努力を挙げる割合が増大するが、幼児期では、特性変容の理由説明として努力を挙げる者は少ない(Lockhart, et al., 2008; 中島・田中, 2017)。本研究においても、特性獲得の理由として努力に言及した者は、年長児でわずかに見られるだけであった。幼児期における言語化能力の限界を考慮すれば、言語的な理由付けの結果をもって、幼児が努力に依存して特性の獲得を考えてはいないと断定するべきではない。実際に理由を回答選択式にした場合は、幼児においても努力を選択する割合は比較的高い(Lockhart, et al., 2008)。しかし、本研究では、あくまで願望のあるなしを実験的に操作したのであり、願望があれば努力し

ただろうと幼児が推測している可能性は否定できないものの、現時点では、あくまで願望に依存して特性の獲得判断をしていると考えておくべきだろう。

特性の違いによる獲得判断の違い

本研究のもう一つの貢献は、現実的特性と非現実的特性という特性の違いによって、将来の特性獲得についての考え方が異なることを明らかにしたことである。

Lockhart, et al.(2008) では、非現実特性の将来における獲得可能性を、5-6歳児も現実的特性よりも低く見積もっており、この年齢の幼児が特性の現実性の違いによって将来の特性獲得可能性を分化して捉えていることを明らかにしている。本研究では、それに加えて、この年齢に該当する年長児においては、願望があってもなくても、非現実特性を将来獲得できるとは考えていないが、一方、年少児においては、特性獲得の願望があれば、将来非現実特性を獲得できると考えていることを明らかにした。

先に、幼児期は、実在と非実在の区別について揺れ動いた認識を持っている時期であると述べたが、年長児になると、将来における特性獲得の推測においても、非現実的特性の非現実性についての認識を制約として働かせて判断するのであろう。一方、年少児では、そのような制約がまだ働かず、願望から特性獲得への推測がなされるのであろう。

今後の課題と結論

以上の考察から、特性の獲得に関して次のような発達過程を想定することができる。年少児から、願望のあるなしに依存して、将来における特性の獲得を判断している。また、年長児になると願望のあるなしに依存した将来の特性獲得判断を維持しつつも、特性の現実・非現実性の判断を制約として働かせて、

将来における特性獲得の判断を行っている。幼児期においても願望することから努力を推測して努力に依存した判断を行っているのかどうかは今後の課題であるが、少なくとも小学生の時期には努力に依存した特性獲得判断をするようになる。

特性獲得に関する考え方の発達過程は、本研究のような仮想ストーリーを用いた推測課題だけでなく、様々な方法の結果を踏まえて今後明らかにしていくべきであるが、本研究は、幼児が特性獲得の条件をどのように考えているか、その一端を明らかにしたと言えよう。

付 記

本研究は、豊島と村瀬がともに島根大学法文学部在籍中に、村瀬を指導教員として豊島が作成・提出した卒業論文（豊島，2005）を村瀬がまとめ直したものである。

研究にご協力いただいた園児の皆様、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 東洋 (1994). *日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて*. 東京大学出版会.
- Harris, P. L., Brown, E., Marriott, C., Whittall, S., & Harmer, S. (1991). Monsters, ghosts and witches: Testing the limits of the fantasy-reality distinction in young children. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, 105-123.
- Keil, F.C. (1989). *Concepts, Kinds, and Cognitive Development*. MIT Press.
- Lockhart K. L., Chang B., & Story T. (2002). Young children's beliefs about the stability of traits: Protective

- optimism? *Child Development*, 73, 1408-1430.
- Lockhart, K. L., Nakashima, N., Inagaki, K., & Keil, F. C. (2008). From ugly duckling to swan? Japanese and American beliefs about the stability and origins of traits. *Cognitive Development*, 23, 155-179.
- 森加代子 (1995) . 幼児にとっての「大人になる」という現実 . *人間文化研究科年報*, 10, 31-39.
- 中島伸子・稲垣佳世子 (2007). 子どもの楽天主義：望ましくない特性の変容可能性についての信念の発達 . *新潟大学教育人間科学部紀要 人文・社会科学編*, 9, 229-240.
- 中島伸子・田中優理 (2017) . 望ましくない特性の変容可能性についての信念の発達：幼児期の素朴楽天主義から児童期の努力依存の楽天主義への移行 . *新潟大学教育学部紀要 人文・社会科学編*, 10, 55-66.
- Norenzayan, A., Choi, I., & Nisbett, R. E. (2002). Cultural similarities and differences in social inference: Evidence from behavioral predictions and lay theories of behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 109-120.
- 富田昌平 (2002). 実在か非実在か：空想の存在に対する幼児・児童の認識 . *発達心理学研究*, 13, 122-135.
- 富田昌平 (2004) . 幼児期における「将来の夢」と空想／現実の区別認識 . *幼年教育研究年報*, 26, 105-113.
- 豊島美佳 (2005) . 非現実特性の獲得に関する幼児の信念：願望の役割 . *鳥根大学法文学部卒業論文 (未発表)* .
- Wente, A. O., Goddu, M. K., Garcia, T., Posner, E., Fernández Flecha, M., & Gopnik, A. (2020). Young children are wishful thinkers: The development of wishful thinking in 3- to 10-year-old children. *Child Development*, 91, 1166-1182.

